

**<講演抄録>9. 乳歯癒合または先天欠如が後継永久歯  
， 歯列及び咬合に及ぼす影響 その1 乳前歯癒合，  
先欠歯の周囲歯及びその後継永久歯の形態的観察(  
第27回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)**

著者	斎藤 薫，畑 弘子，神山 紀久男
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	14
号	2
ページ	230-230
発行年	1995-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31527">http://hdl.handle.net/10097/31527</a>

腔内所見；①  $\overline{5}$  が欠損し， $\overline{67}$  の近心傾斜に伴う咬合時の低位がみられた。②  $\overline{654}$  の口蓋側転位がみられた。③ 咬合時，下顎の右側偏位がみられた。④ 顎関節症状はみられなかった。治療：初診約1ヵ月後にメタル・オクルーザル・スプリント（ $\overline{7-4}$  |  $\overline{3-8}$ ）を装着し， $\overline{67}$  部の挙上，下顎偏位の補正，咬頭嵌合位の安定がえられた。マイオモニターと頸部鍼治療を2週間に1回，計5回施行した。装着3週間後に，頸・肩・腰部痛の顕著な消退がみられ，直立時，頭部左側傾斜，左肩高位，右腸骨稜高位や頸椎の逆彎曲等の全身の姿勢等の改善がみられた。装着半年後の現在，無症状にて経過している。

考察及び結論：顎口腔機能の異常は身体姿勢のバランスを崩す可能性が示された。顎口腔領域の治療は，顎口腔と全身との関連を考慮して行われるべきで，これらの因果関係の基礎的研究と歯科・医科・鍼灸科等による全身の総合的診断・治療が必要と考えられた。

9. 乳歯癒合または先天欠如が後継永久歯，歯列及び咬合に及ぼす影響 その1 乳前歯癒合，先欠歯の周囲歯及びその後継永久歯の形態的観察 斎藤 薫（小児歯科），畑 弘子（障害者歯科治療部），神山紀久男（小児歯科）

乳歯癒合，先天欠如が周囲歯とその後継永久歯に対し，どのような影響を及ぼすか調査を行った。対象は，

東北大学歯学部附属病院小児歯科外来を訪れた患者のうち乳歯列に癒合乃至先天欠如が認められた小児40名でそれらの乳歯列，永久歯列の石膏模型を用いて癒合，先欠の発現部位とその周囲歯の形態変異について調査した。なお対照群は歯数変異のない26名の経年的模型を使用し，形態変異発現頻度の比較を行った。その結果，乳歯列に癒合，先欠を有する歯列でAB癒合はBC癒合よりも発現頻度が高く，その後継永久歯では歯数正常41列中22例，欠如15例，癒合4例であった。また癒合，先欠歯の発現部位の周囲歯と，その後継永久歯の周囲歯には，隅角の欠如，尖頭の欠如，唇面豊隆の扁平化，舌側面近遠心隆線の欠如などの形態変異を認めた。調査群における形態変異発現頻度は，乳歯列で87.5%，永久歯列で95.0%であり対照群ではそれぞれ28.8%，3.8%で乳歯列，永久歯列共に， $\chi^2$ 検定より有意水準1%で有意差を認めた。これを健側についてみると調査群では，乳歯列57.5%，永久歯列65.0%で，対照群ではそれぞれ28.8%，3.8%，乳歯列では癒合，先欠が認められなくとも形態変異は発現するが調査群よりは低かった。また，歯種別にみると乳歯列では，患側でC，健側でB,Cに多く，永久歯列では，患側，健側ともに2,3に多く認められた。この形態変異は歯の進化という点から考えると癒合，先欠と同一の範疇で捉えられるものと考えられる。